



親子で 「居心地のいい場所」を目指し

対馬初音さん&小杉とし子さん（NPO法人プランニング∞遊）

対馬初音さん(写真左)プロフィール：東京都生まれ、管理栄養士、NPO法人プランニング∞遊代表。
杉並区子ども子育て将来構想委員、PTA会長などを通じて子育て支援に幅広くかかわってきた。
現在、杉並区を拠点に活動する総合的な子育て支援のNPO法人。

小杉とし子さん(写真右)プロフィール：茨城県生まれ。母親クラブ代表、NPO法人プランニング∞遊副代表。
杉並区社会教育委員(2期)等を務め、子育ての当事者として、子育て・地域活動にかかわってきた。

■ママ友だちのネットワークが原点



▲初代子育てマップ

子どもを持つと、にわかに身近な地域のことが気になるものだ。それまでは気にもとめなかった最寄りの駅前にある路上駐車の自転車(ベビーカーで動くときに気になる)や、近くの公園に落ちているタバコの吸い殻(子どもを遊ばせるときに気になる)にも目が行くようになる。そしてそれ以上に目が行くのが、同じくらいの子どもを持つ母親たちの存在である。独身時代からの友だちがいくら多くても、夫が育児に協力的だとしても、母親になった途端に欲しくなるもの、それは、「同じ学校や幼稚園、保育園に子どもを通わせる近所のママ友だち」なのだ。

今回ご紹介するNPO法人プランニング∞遊は、「学校教育」、「絵本の読み聞かせ」、「育児支援」をテーマにしたさまざまな活動が続いている。1998年、区民企画講座・井草子育て生活ひろば「子育てマップを作ろう」に集まった対馬さん、小杉さんを含む母親た

ちが、講座終了後もネットワークを持ち、活動を広げるうちに現在の形が出来上がっていった。

二人は、子育てマップづくりに参加する前から地元の児童館主催の「母親クラブ」、小学校のPTA活動などを通じて、近所のママ友だちのネットワークを作っていた。そして子どもが3歳になったころ、子育てマップづくりに参加する。

「近所の母親どうしてサークル活動のようなことを続けながらも、どこかで限界も感じていて、少しエリアを広げてみたくなっただんです。その点で子育てマップづくりは、親子で足を伸ばせる区内の別の地域という距離感がちょうどよかった」

歩いて行けるほどの近所だと、時折息苦しくなる母親どうしのコミュニケーションも、ある程度の距離を置くことで気楽に構えていられる。そうは言っても同じ杉並区在住という共通点がある分、育児と地域の関わりについて話が通じやすい。そんな居心地のよさは、母親だけでなく子どもにもよい影響を与える。当時3歳だった対馬さんの双子のお子さんと小杉さんのお子さんとは、小学5年生になった現在も仲がいい。母親どうしが心から打ち解けているかどうかを、いっしょにいる子どもはすぐに見抜く。母親にとって居心地のよい場所は、子どもにとっても同様ののだ。

■地域から区を見る、 区から地域を見る



▲多彩な活動

ネットワークが広がり、情報も広く集まるようになると、見えるものが変わってくる。「それまで地域から区を見るだけだったのが、区から地域を見るという視点を持てるようになった」という。視野が広がれば活動の幅も広がってくる。子育てマップのメンバーの有志5人がはじめた「子育てマップの会」という自主グループは、01年「プランニング∞遊」と名前を改めて再スタート。「みんなで楽しみながらやっぺいこう」という遊び心が「∞」(無限大)を付けたところにもあらわれている。

「子育てマップづくりは、当時まだ珍しかった託児つき」の講座だったことも、大きな参加理由であった。現在は各地の児童館で主催している、乳幼児と母親のためのサロンの存在である「ゆうキッズ」も当時はなく、ゼロから3歳児までを受け入れる親子向けの事業もなかったのだ。少子化問題が表面化したのはここ数年のことで、杉並区役所に子育て支援課ができたのは06年のこと。子育て支援の窓口が一本化される以前のことで、活動を始めるたびに協力してもらえる機関を探しては理解を求め、手をつないで

＼

た。あるときは、社会福祉協議会、あるときは教育委員会など。その経験が、現在に至る幅広い人脈や財産となって積み重なっている。

99年から発行の「suginami幼稚園ガイド」に続き、02年から「suginami区立小学校ガイド」も発行。どちらも区内の公的教育施設をトータルに紹介する、はじめてのガイドブックとなった。ほかにも、親子で参加できる講座や母親自身が楽しめる講座などを次々に実施している。

■身近な興味や疑問から 新しい活動が生まれる



▲みんなの子育てNO. 4、NO. 5

自分たちが企画した子育て支援プログラムに託児サービスを付けたくても、保育者が見つからず、それなら自分たちで養成しようと04年11月から、「保育者養成講座」を開催。そこで育った保育者を、区や他の団体主催の行事に派遣するサービスをスタート。この事業が、託児サービス業が区内で発展するきっかけにもなった。03年から杉並区教育委員会発行の「みんなの子育てシリーズ」の編集・執筆を担当。04年7月にNPO法人格を取得する。06年にドコモ助成金事業として「軽度発達障碍って？」講座を開催した。

「活動を通して、あるいはふだんの生活で会う人たちやいろいろな情報から、こういうものがあたらいいなという、いわば個人的な希望や興味が、新しい活動の出发点。軽

度発達障碍について取り上げたのも、その情報が足りないと思ったから」ほかにも、小学校で行われる絵本の読み聞かせボランティアは、絵本の選び方も読み方も果たして独学でいいのか？ という疑問から「読み聞かせボランティア実践講座」(05、06年)「読書ボランティア講座」(すぎなみ地域大学)を開催している。

自分たちが感じる課題や希望を、より多くの人に向けてカタチにする。ドコモの助成金で事業を成功させた実績から、他からの助成金も得やすくなり、それだけ寄せられる期待も大きくなる。とはいえ、運営面での苦しさはまだまだ続いている。

■あとから来る人たちを支える 「居場所」に



▲地域大学読書ボランティア講座風景

「いまは種まきの時期だと思っています」二人とも会社員を経て、結婚退職し、子どもが生まれ、専業主婦とプランニング遊の活動を両立してきた。親子ぐるみのつきあいのメンバーとは、子どもの成長に合わせて話題も問題意識も自然に変化してきた。それでも、変わらない「思い」は持ち続けている。

「自分たちの子どもは成長していくけれど、あとから来る人たちを支えられる居場所でありたい。医療も学校も男女共同参画も、子育て支援のキーワードは幅広く、どこにでもつながっている。何か問題を抱えていたり、また、何かはじめたいというお母さんがいたら、相談にのれる場所でありたい」

親子ともに「居心地のいい場所」。それがきっかけとなって、プランニング遊が生まれたように、いま子育て支援を受けている人が

やがて次の誰かを支援できるようになれば、地域の子育てネットワークは広く、深くなるにちがいない。また、区内に増えている子育て支援団体にとって、プランニング遊の存在がお手本にもなっているだろう。

杉並区が07年からスタートした「すぎなみ子育てサイト」に参画。地域の子育てを楽しむ、問題があれば少しでも早く解決できるように、行政にできることや関連情報をジャンル別に紹介している。地域で暮らす親子どうしを結び、自治体や企業とのパイプ役も果たしているプランニング遊。「楽しくやっぴこうね」という当初の仲間たちの思いは、あとに続く母親たち、子どもたちにも自然に受け継がれてゆくことだろう。